

黒魂

枯れ木の小説

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

オリ主が銀魂の世界で頑張る話

目次

始まり	1
檻の生活	5
鴉の一步	8
訓練	12
死闘	16
勉強	19
任務	22
戦闘	25
帰還	31
脱獄	34
脱獄2	39
目覚め	43

始まり

俺は死んだ。

俺は死んだ、、、と思う。

俺は死んだ、、、多分。

俺死んだよな？

そう、俺は死んだはずだ。

なのに、なぜ息をしている！

確か仕事帰りで

なんだっけ？

っ車だ！

俺轢かれて死んだんだ！

童貞のまま。

そう！

童貞まま。(大事な事なので、二回言いました)

周りを見ると、小さくて細い手が見えた。

なぜか俺の思い通りに動く。

あれ？

これ俺の手？

いやいや某推理漫画じやるまいし。

それに今日マンデーだし。

まあいい状況を確認だ。

まず俺は生きている。

そして、体が小さい。

そして、手足が鎖に繋がれている。

前を見ると、鉄格子がる。

どうやら、檻の中らしい。

ごめん、理解できない。

「目が覚めましたか」

混乱していると隣の檻から、声をかけられた。

栗色の髪で、女性の様に長い髪の男性が、声をかけてきた。返事をしようとしても、声が出なかった。

「随分と落ち着いてる様子ですね。とても子供には見えません」
落ち着いてなんていない。この体は表情筋が全く動かないらしい。それに、俺は子供ではない！

まあそんな事はいい。まず、ここはどこだ？わからねえ！

「ん、ここがどこですか？」

こいつはエスパーか！いやそんなちやちなもんじゃ断じてねえ以下略。

「んく強いて言うなら

鴉の巣です」

何言ってるんだこいつ。

よくわからなかった。

話を聞くに、どうやら此処は天照院奈落という、組織の巣らしい。

「目が覚めたようだな」

説明を受けていたら、灰色の髪の日つきの悪い男性がこちらに向かって来た。お坊さんの様な、少し和風の格好をしている。

「お前は大罪人だ」

はい？

マジで何言ってるの？

大罪人？

俺は誰もが認める社畜様だぞ。

「俺は、悪いことをした覚えはない」

やっと声が出た。

「フツ、組織の人間を何十人も斬つといて、よく言えるな」
ほえっ

何してんだ俺。人斬ったって、なんだ!?

俺は母さんに、虫一匹ですら、大切にする子だったって、言われてたんだぞ!

俺が殺人なんて、するわけねえだろ。

全くもって記憶にございません。

俺がどこぞの、政治家のみたいな事を考えていると、目つきの悪い男が続いて言った。

「それにどこで手に入れたかは知らんが、天導衆に代々伝わる名刀《黒雨》

もお前が持っていた」

そいつは刀を見せながら言ってきた。

俺は何故だか分からないが、その刀のことは覚えている気がする。懐かしい感じだ。

「返せ、そいつは俺の刀だ」

思っていると言葉に出ていた。

「つ流石というべきか」

訳のわからないことを言っている。

「普通なら処刑だろうが、

お前はただ強い。生かしてこの組織に入れるのが、上からの指示だ」

そう言っつて男は帰って行った。理解が追いつかない。

「おやおや、怖い顔をしないで下さい」

してたつもりは無かったが、一度深呼吸をして心を整える

「何も聞かないんだな、」

純粹にそう思った。あいつが言うには俺は殺人鬼らしい。記憶にないけど。いや、なにそれ、逆に怖い。

「聞いて欲しかったですか?」

「いや、聞いても何も答えられない」

知らないからな。てへっ

「松陽と言います。吉田松陽」

いきなり名乗ってきた。こいつの親は何を考えて名前を決めたん

だろう。吉田松陰をリスペクトしてるのか？

まあそんな事はどうでもいい。

「あなたは？」

男は俺の名前を聞いてきた。

「俺は、っ」

聞いてきたは、いいけど思い出せなかった。俺は誰だ？

さて、さて、さて、いや、冷静になれ。大丈夫だ。一度や二度自分の名前を忘れる事なんて、よくある話だ。多分。きっと。思い出せる。この俺なら！

思い出せませんでした。前世の名前すら、出てこなかった。なぜ吉

田松陰は、出てきて自分の名前が出てこないんだ。

気持ち悪かった。

自分が誰なのかわからないのが、すごく気持ち悪い。

「名はない」

そう言っておいた。

「そうですか」

悲しそうな顔をされる。

俺を哀れむな！断じて厨二病ではない！

俺、これからどうなんの？

檻の生活

まず状況を整理しよう。

俺は死んだ。神様に殺されてもいない。神様にあってもいない。ましてや特典なんかも、もらっていない。そしてこの世界は今、江戸時代らしい。もちろん、俺の知っている江戸時代ではない。この世界には天人と呼ばれる宇宙人がいて、現在戦争中。この戦争のことを、攘夷戦争と呼ぶらしい。

これだけは、言いたい。

俺の知ってる江戸は、どこへ行った！

エーリアンだか何だか、知らないけど、ふざけるな！

エーリアンは、プレデターと戦ってればいいんだよ！

なんで、人と戦ってんだ！

チートどころか、手足鎖で繋がれてるんだけど！

まあ現実逃避は、これくらいにしておこう。あーだこーだ言っても、仕方がない。何事も、ポジティブに考えるんだ。今、ここは檻の中だが、食事はもらえるいやーラツキー。もし、繋がれてる鎖がチェーンジエールだったら、どうなってたか。いやーラツキー。もし、転生されたところが、地獄だったら。いやーラツキー、ラツキー。

カタン

悲しみに浸っていたら、何かを置く音がした。

どうやら食事らしい。食事は一日一食。お茶碗一杯の米に、コップ一杯の水だ。普段なら文句を言っていただろうが、この体は燃費がいい。こういうのには、慣れていたのかもしれない。

食事を持ってきたのは子供だった。子供にまで働かせるとは、なんてブラック企業だ。

「いやー食事ですか」

そう言ったのは隣にいる男、吉田松陽

「けれど、今お腹空いてないんですね。あつ、もしよかったら食べますか?」

俺に気を使っているのだろう。こいつの人柄がよくわかる。全く何をして捕まったのだから。とりあえず返事を返そうと思い、出来るだけ穏やかに、優しく返す。

「はい」

無理だった。この体にも困ったものだ。

熟年夫婦じゃないんだから、しつかり返さないと。

「そうですねー。あつ、もしよかったら食べます?」

そうやって聞いた相手は、食事を持ってきた子供だった。

「…」

聞こえていないのか、無視をしているのか、わからない。

「そうですねー。今お腹空いていないんですねー。あつもしよかったらたべますか?」

もう一度再現をして聞く。何の意味があるのだろう。

「…」

はい、無視ー。

すると、子供が俺の顔をジーツと見てくる。

俺も視線を合わせる。

「あなたも同じ、私と同じ」

驚いた。その子供が女の子だと気づいたからだ。なんかごめん。

「私と同じ、人殺しの目」

そう言ってきた。

まあ、俺は自分の顔を見たこと無いから、否定しようがない。もしかしたら、本当に人殺しの目をしているのかも、しれない。子供は、思ったことを口に出すというし。あつ俺も子供だった。

「それは、違いますよ」

しれっと入ってきた。無視されていたのに。

「私からしたら、二人とも綺麗な瞳です。羨ましいくらいです」

こいつは、本気でそう思ってると感じた。嘘を見破る仕事を、していたからわかる。先に言っとくけどギャンブルとかじゃないぞ。まず、仕事じゃない。取引先とかの話だ。もし、嘘を付いているのなら、こいつはとんだ奇術師だ。

「そう、」

そう言っただけで彼女は、帰っていった。

鴉の一步

「いやー君が檻に引越してから、一ヶ月が経ちましたね」

「何か、お祝いをしましょうか？」

こいつは今、檻にいるってことを忘れてるのか？

手足を、鎖で繋がれてるやつに、言うセリフじゃない。

「それにしても、一ヶ月というのは早いものです。年寄りになると時間が早く過ぎる感じがします」

二十代後半の見た目の奴が、何言ってるんだか。まあこいつの年齢知らないから、もしかしたら見た目以上に、年を取っているのかもしれない。

そんなことを考えてると、ドアが開く音がした。時間的に食事では、ないらしい。来たのはいつしかの灰色の髪の子、今日もやはり目つきが悪い。

「元氣そうだな」

どこがだよ。

俺の手足は、かなり細い。まあ、食事を十分に取れてないから、仕方ないけど。

「覚えてるか？、あの時いったことを」

確かを組織に入れるとか、どうとかがって話だ。子供の俺に、声をかけるということとは、よっぽど人員不足なのだろう

「奈落に入ってもらおう」

まず一つ聞きたい。

時給は、いくらだ。

これは、あくまでビジネスだ。金が、発生しないと論外。メリットが存在しない以上やる意味がない。

「俺に何の得があるんだ」

聞いてみた。

「簡単だ、ここで死なずに済む」
なるほど

脅迫じゃねーか！

絶対一発は、殴ってやる。

「そしてもう一つ、黒雨をくれてやろう」

俺は、言葉に詰まる

黒雨

何も知らないが、直感的にこいつは離してはダメだと、感じた物。黒雨なんて、聞いたこともないし、見たこともない筈だ。つまり、俺が転生する前に、俺であり俺じゃない誰かが、欲した物なのだろう。だから、返せなどと言ったのかも、しれない。

「これも上からの指示だ。刀は斬らなければ、ただの棒だからな」
「わかった」

俺は、ただ返事をした。正確には、返事をするしかなかった。灰色の髪の男は何も言わず、帰って行った。

「よかったのですか？」

松陽が訪ねてきた。

「何がだ？」

「いいえ、貴方が大丈夫なら問題ないです」

そう言って、松陽はニコリと笑った。俺はそのまま、眠りについた。

「起きろ」

うるさい、起きてる。そう思いながらも、目を開ける。すると予想していたとおり、灰色の髪の毛の男がいた。昨日とちがうのは、部下を二人連れてきていることだ。いつもなら、あと五分と、言っていたところだが、今日はよく眠れていなく、早く起きていた。そりゃそうだろう、つい一ヶ月前まで一般ピーポだったんだ。いきなり、鴉になれと言われて、寝れる訳ない。

ガチャ

俺が考えてる間に、足の鎖を外された。外されたので、俺は灰色の髪の毛の後ろに回り蹴り飛ばした。体が勝手に動いてしまった。確かに、一度殴つてやると思ってたけど、こんなところで蹴るつもりは、なかった。それにしてもこの体、身体能力高すぎだろ！

ヤムチャくらいあつたんじゃないか。おい、今ヤムチャバカにしただろ！

ヤムチャはなあ

最強の敵のサイバイマンと、相打ちになった男なんだぞ！

そして今現在。もちろん俺は取り押さえられる。

まあいいやスッキリしたし。我が生涯に、一片の悔いなし。

嘘です。あります。死にたくありません。

「どういうつもりだ！」

部下の男が、俺に尋ねる。

「一ヶ月も檻にいたんだ、ヤムチャしたくなる」

俺は、そう言つて笑つた。そう、ヤムチャしたくなった。間違えた、ヤムチャだ。

俺は、笑うしかなかった。それにしても俺、ストレス溜まつてたんだな。ストレスは、自身が知らないうちに溜まつている物とは、よく

言ったものだ。

「貴様！」

部下が怒鳴り、俺の首を斬ろうとする。
が

「やめろ、構わん」

灰色の髪の方が止めに入った。

驚いた。てつきり斬られると、思ったんだけど。意外と、心が広いのかもしれない。

「ついてこい」

俺は黙って、ついていった。

訓練

俺は、今どこにいるかって？

お風呂です。

一ヶ月間も、お風呂に入っていないませんでした。笑えない。全くもって笑えない。一ヶ月だぞ！車の免許だって取れる。

考えても見ろ。夏休み丸々、お風呂入っていないという事だぞ。

ふざけすぎだ全く。

そんなわけで、やっとお風呂に入れる。

脱衣所で、ボロボロになった服を脱ぐ。

かなり、ボロボロだ。

街中で、プロレスラーに絡まれた後に、バイクで引かれた感じの服だ。ちよつと、何言ってるか、分からないかもしれないが、そんな感じの服だ。

俺は、どうでもいいことを、考えながら浴槽の扉を開ける。やはりちゃんとしている。沢山の人が、ここを利用するのだろう。脱衣所も、しっかりとしていたので、予想はしていた。一言で言えば、千と千尋に出てきそうな感じだ。まあ、和風という事だ。俺はまず、体を洗おうと思い、洗い場の前の椅子に腰を下ろす。すると、鏡の中の子供と、目が合う。

そういえば、俺は自分の顔を、見たことが無いと思い、鏡を見つめる。少し曇っていたので、シャワーで鏡を流す。黒髪、黒目の美少年だ。

フツ

勝った

人生は、顔だ。どんなに運動神経が良くても、顔がコイキングだったらモチないし。どんなに頭が良くても、顔が、某北の国の人なら、嫌われる。俺の前にいた世界は、実にわかりやすかった。俺の今の顔は無表情だが、誰が見ても美少年と、言うだろう。俺はそんなことを考えながら、自分の目を見る。濁っている気がした。あの時言われたこ

とを、思い出す。

「人殺しの目」

俺は、人殺しの目を見たことがないから、知らないけど。実際こんな感じだろう。彼女が言ったことも、納得してしまう。

俺は、シャワーで一ヶ月間の汗を流す。シャンプーを大量に使い、髪を洗う。

そして、ふと思う。

江戸時代にシャンプーってあるの？

いや、その前に廊下にあつた電気、ここにあるシャワー。よく考えたら、江戸時代に、ないものでもしかしたら、俺の知ってる江戸時代と、かなり違うのかもしれない。まあ、宇宙人いる時点、かなり違うけど。あまり江戸時代という概念に、囚われてはいけないのかも、しれない。

そして、俺はお風呂から上がる。すると着替えが置いてあつた。

黒い着物だ。

奈落の制服みたいな、物なのだろうか。俺はそれに着替えて、廊下に出る。すると、灰色の髪の男が壁に背を向け、立っていた。

「いくぞ」

男がただそう言った。俺は、ただ着いて言った。

男が途中で立ち止まる。

「お前は今日から夜城《ヤシロ》と名乗れ」

俺は、ただ頷いた

たどり着いた場所は、中庭だった。中庭には、子供が三十人くらい整列していた。よく見ると、食事を持ってきてくれた、彼女もいる。

「今日は、ここで行う」

男がそう言ったが、誰も返事をしない。

嫌われてるのか？

あとで、缶コーヒーでも奢ってやるか。

「お前たちが行うのは、殺しではなく暗殺だ、そのところはよく理解しておけ」

人に笑顔で、胸を張れる暗殺をしましょう。

心の中でそう呟いた。

今から組手をやらされるらしい。子供二人が向かい合っている。どうやら始まるらしい。

「始めろ」

男がそういうと、組手を始める。

お互い、胸元からナイフを取り出す。

ナイフでお互いを斬り合う。

一人が頬を斬られる。もう一人が耳をかすらせる。実力は、互角だろう。

それより。

あれ、本物のナイフ？

そう、こいつらは本物のナイフで、斬り合っている。

頭がおかしいとしか、言いようがない。

考えてる間に、一人が足を滑らせた。

その隙をもう一人が逃すはずがなく、首を

搔っ斬る

一人は死んでいて。

もう一人が返り血を浴びていて、死体を見て立っていた。

周りも何も言わずに、立っていた。

俺もその一人だった。

俺は人が死んでもいても、涙は出なかった。

俺は、あいつが言ったとおり、人を殺しているのかもしれない。

そう思った。

そう思わざるを得なかった。

「次」

灰色の髪の方がそう言った。

「次、夜城、骸」

俺は、呼ばれて前に出た。骸と呼ばれたのは、あの時の少女だった。

「始めろ」

死闘

絶体絶命です。

仲間同士で殺し合いを、させるとか頭沸いてるだろ。

俺、死ぬのかな。

タイトル「夜城死す」になってないよね、大丈夫だよな。骸って呼ばれたあの子、めっちゃこっち見てるし。やる気満々じゃないですか。

スイッチがあるなら、すぐオフにするのに。

取り敢えず状況の、確認だ。今から殺し合いをさせられる。骸さんは、やる気満々。

はい、詰み。

殺し合いなんて、した事ないし。相手の様子を見るに経験者だろ。勝てっこねーよ。

まあ俺は殺す気、さらさらねーけど。俺はそこまで、一般ピーポー辞めたつもりはない。この勝負の勝利条件は、相手を殺さず自分も死ななず、殺し合いを終わらす事。

現実はとんだ、無理ゲー。

でも、やるしか道はない。

「始める」

男がそういうと、骸は迷いなく走り出す。

そして俺に刃を振るう。俺は、それを紙一重でかわす。この体のハイスペックさをまた、理解する。

今のは、完全にオート操作された気分だった。熱い物を触った時、勝手に手を遠ざけるのと、一緒だ。俺の体が危険を察知したのだから。

息をするまもなく、第二撃を振るう。完全に急所狙いに来ていますね、はい。人間の急所は、六つあると言われているが、骸は的確に狙いに来ている。

俺はその攻撃もかわし、後ろに下がる。

今度は、自分の意思で交わせた。

相手が一度止まる

「攻撃しないの？」

俺に訪ねてきた。

「得物を持ってないからな」

言い訳をしておく。

俺がそういうと、灰色の髪の男が動きを見せる。

部下と話しているようだ。話した後に、部下が刀を持ってくる。

黒雨だ。

「これを使え」

灰色の髪の男がそう言い、黒雨を投げる。俺は、それをキャッチする。これで言い訳する材料がなくなった。俺は、黙って鞘から刀を抜く。

綺麗な刃だ。刀を知らない俺でも分かるくらいに、すごい刀だと感じる。あー懐かしい気分だ。俺の口から笑みがこぼれる。

まあ刀をもらったところで卍解できないけど。間違えた挽回だ。卍解したら色々ダメな気がする。

「これで大丈夫ね」

そう言っつて、俺に一瞬で近づき刃を振るう

怖いな。

俺は刀でガードをする。もちろん、この一撃で終わるはずもなく、二撃、三撃、四撃と連続で刃を振るう。俺は刀でガードをするなり、交わしたりする。急所ばかりを狙っているので、回避しやすいまあ子供だからね。俺が回避しかしていないのに、灰色の髪の男も骸も何も言わない。まあ言わないなら都合なので、回避を続ける。本当なら、頸にトンと恐ろしく速い手刀を入れたのだが、残念ながらそんなカツコイイ事が出来ない。まあ、そんな事を嘆いていても仕方がない。

おっと、気がつけば始まってから二十分近く経っていた。

ここで、本日二度目の骸の動きが止まる。

「なんで攻撃しないの？」

同じ質問だ。

さて、どうするか。ここで正直終わらせたい。

「これは、暗殺の訓練だろ」

俺の言葉に骸は、クエスチョンマークを浮かべる。

「暗殺者が、こんな時間に時間かけたら終わりだ。十分を過ぎた段階で逃げるのが普通」

「でも、これは訓練」

「訓練でも暗殺だろ。時間を掛けた段階でお前の負けだ」

「…」

心を折るんだ。

頑張れ俺。

「これが実戦なら、多対一に持ち込まれ、拷問され終了」

言い訳がここまできると、凄みが出てくる。

「小鴉一匹で大鴉が釣れる」

「それに、お前の獲物は、もうこれ以上は無理だ」

パキンッ

俺が、そういうと、骸の刀が割れた。

俺は最初から、刀のみを狙っていた。刀が壊れれば攻撃が出来ない。

「帰る」

逃げの一択。

久し振りにかなり喋ったな。

勉強

死闘の後俺は、灰色の髪の毛の男の部下に止められ、檻に戻される。どうやら、まだ檻の中での生活は、続круらしい。

「おかえりなさい」

松陽が俺にいう。

「ああ」

いつもなら、無視をしていただろうが挨拶は、一般常識なので返す。「どうでした?」

松陽が、俺に尋ねてきた。今日の事を、聞いているのだろう。

「生きづらい世の中だ」

素直に、そう思った。下手したら、俺は死んでいたかもしれない。そう考えると、今日は眠れそうにない。

「ここだけが世界じゃないですよ」

松陽が笑って答える。

一度、聞いて見たいことがあった。

「あんたは、なんで檻にいるんだ」

一ヶ月、一緒にいたが、こいつが悪いことをする奴には、見えない。

「そうですね、強いて言うなら世界が私を拒んだからでしょう」

笑顔で返す。素直にすごいと思う。笑顔で、そんなこといえる奴は、中々いない。

「世界か」

俺は、何も知らない。

「この世界の事。」

生きる為には、やはり必要な事なのかもしれない。

「私が教えて差し上げますよ」

こいつは、エスパーか何かか

「頼む」

「ですが、その前に貴方の名前をまだ聞いていません」

そういえば、そうだ。俺は今日名前をもらった。俺は、貰った名前を教える。

「夜城、夜城という名を貰った」

「いい名前ですね。私の事は松陽とお呼び下さい、

夜城」

「わかった」

「…」

俺が返事をする、松陽は不満そうに睨んでいる。

「？」

何で睨んでいるのか、わからない俺は、クエスチョンマークを浮かべる。

「そこは、「わかった松陽」と言うところですよ」

「ウザい」そう思い、目を閉じる

意外と寝れた。

それから、俺は松陽に文字、歴史、文化などを教えて貰った。文字は、今までいた世界と似て非なるものだったので、一から覚え直す。

全く知らない歴史、全く知らない文化を知れるのは、中々面白かった。授業を始めてから一週間が経過しようとした頃に、骸が俺たちの食事を持ってきた。骸とは、あれ以来会っていない。骸は興味深そうに、俺たちを見ている。どうやら、気にしていないようだ。

「今夜城くん、勉強を教えているんですよ」

松陽が骸に教える。

「勉強？」

「どうやら、勉強というものがわからないらしい。」

「文字の読み書きや、この世界の歴史、文化を教えているんです」

丁寧教える。

「そう」

「骸さんも、参加しますか？」

松陽が勉強に誘う。

「いい」

ただ、そう言って走っていった。

けれど翌日も、興味深そうに見ている。次の日もその次の日も。その都度松陽が声をかけるが、断られる。

そして、さらに一週間が経過した時。

いつもと同じように興味深そうに、俺たちの様子を見ている。

「楽しいの？」

俺に訪ねてきた。

「楽しくは、ない」

思った事を答える。

「なんでやるの？」

まあ確かにそうなるな。

「楽しくは、ないけど面白いから」

「面白い？」

「この世界が、どう出来てどうなっているのかが知れる。

どのように、どんなふうにも、何が起こったのか分かる」

「それを、知って何になるの」

「わからない、

けど知ってて損は、ないだろ」

「…」

「見るか？」

骸はコクリと頷く。

俺は、メモをしたノートを見せると、興味深そうに見ている。

「読めない」

「読めないのかい！

「じゃあ勉強が必要ですね」

そう言って松陽は、また笑った。

任務

俺が、この世界に来てから二年が経った。

とても大変な二年だった。見聞色、武装色、霸王色の修行をし、猛獣どもと戦う日々。考えるだけで、涙が出てくる。俺は、そんなことを考えながら、シャボンディー諸島に向かう。

すみません嘘です。だが二年経ったのは、本当だ。今までの生活とあまり、変わらない日々。俺は年齢がわからないが、大体12歳くらいだろう。骸もそのくらいだ。檻の中で、骸とともに勉強をする。骸は、相変わらず無口だけど、前よりはマシになった気がする。まあ、俺も人の事言えないけど。コミュ障は、この世界に来て、治らないらしい。

今日、俺たちは任務を与えられた。この任務をクリアすれば、一人前の鴉として認められる。まあ認められなくても、いいけど。俺が、やりたくないと言っても、こいつらはやる気満々だろう。と思い、後ろを見ると、俺より少し年上くらいの子供が、十人集められていた。その中に骸もいた。任務の内容は至ってシンプル、お偉いさんの暗殺だ。暗殺、暗殺って物騒な世の中だ。まあ、この世界に、慣れてしまっている俺もいる。何回も何回も、人を死ぬ所をこの目で見ている。俺の涙は、とうの昔に枯れているのかもしれない。いや、そんな物、存在しなかったのかもしれない。そして、集合場所を決め、解散する。

「どうしたの」

骸が俺に尋ねてきた。

「いや、何でもない」

俺は、適当に誤魔化す。

「そう、」

ただそれだけ、言って無言で集合場所に向かう。集合場所に着き、あたり見渡す。全員が全員、同じ格好をしている。黒い着物に、藁笠をして錫杖を持っている。全くどこの宗教だ。俺は、錫杖は待っていない、代わりに黒雨を腰にぶら下げている。他は何ら変わらない。

俺たちが着くと「いくぞ」と、だけ言い目的地に向かう。目的地は西の外れにある場所で、最短でも二日くらいは掛かる。俺たちは、ただ無言で歩き続ける。

気づけば辺りは暗くなっていた。

先頭の人が歩くのを、やめる。

どうやらここで一泊するらしい。

薪に火を付け辺りを照らす。

俺たちは、それぞれ食料を摂取する。食料は、水と兵糧丸を渡された。いや、どこの忍びだよ。まあ無いよりはましなので、兵糧丸を齧る。

「美味しくない」

そう言ったのは、俺ではなく骸だった。骸は焚き火を見ながら、体育座りで兵糧丸を齧っていた。そして、思い出したかのようにノートを取り出し、メモをし始める。何をしているのかと思えば、漢字の読み書きの練習をしていた。

素直にすごいと思う。

俺は小学校時代。

書取りをしていないのに、書取り帳を探すふりをしていて。探す振りさえすれば、やってあるのかと、錯覚させる事が出来るからだ。そして、何食わぬ顔で「忘れました」という。そして先生に、忘れるという字は心を亡くすと書くんだと、教えてもらった。懐かしい。

骸は、淡々と漢字の練習をする。俺はそれを横目で見ながら、眠りについた。

太陽の眩しきで目がさめる。けれどまだ早いらしい。俺は周りを見渡すと、真横で骸が寝ていた。俺は、骸を起こさないように立ち上がり、毛布をかけてやる。俺は、顔を洗おうと思ひ、川を探す。すると、綺麗な川が見つかった。昨日の汗を、今のうちに流そうと思ひ、水浴びすることにした。水浴びを、みんなが起きる前に終わらせる。そして、泊まった場所に戻る。そして全員が起きて、また歩き始める。目的地に到着した頃には、もう太陽が落ち始めていた。目的地というより、ターゲツトを発見したというべきか。ターゲツトは、駕籠の中

にいる。駕籠の周りには、用心棒と呼ばれる人たちが沢山いる

さて、いつ突撃するのか。俺達は、合図を待つ。ターゲットが人通りの少ない場所を通る。絶好の機会だ。仲間が合図を出し、全員で飛びかかろうとする。

俺は、飛び込む間にふと思う。

絶好の機会過ぎないか？と、

嫌な予感がする。どうやら嫌な予感が、的中したらしい。

罨だ。

俺たちの外側から忍びらしい人達が、何十人も出てくる。

さて、どうするか。

戦闘

俺たちは、忍びに囲まれてしまった。しかも、かなりの手練れだに見える。もしかしたら上忍、いや、火影クラスかもしれない。螺旋丸とか、撃つてくるかもしれない。冗談は、この辺にしておこう。様子を見るに、かなり用意周到な奴らだ。俺たちの計画が、漏れていたのかもしれない。

正直言つて、俺たちに勝算はない。とんだ厄日だ。こんな事なら、占いでも見てくれば良かった。見てれば、ラッキーアイテムで回避出来たのに。こんな状況なのに不思議と、落ち着いている。慣れというのは、恐ろしいな。味方もかなり静かだ。訓練で、心を消していたのだろう。さて、ここで取れる行動は三つ。

一つ、無茶を承知で突っ込む。

二つ、自害する。

三つ、命乞いをする。

うん、どれも死ぬやんけ。あいつらは、俺たちの首を、本気で取りに来ている。でなきゃ、あの人数で来るはずがない。様子を見るに全く油断していない。俺たちは、見るからに子供なのに、油断していないということ、奈落を甘く見ていないのだろう。

さて、どうするか。

後らに振り返り、味方の様子を見る。

味方を見るにやる気満々だ。

思わず笑ってしまう。

選択肢四つ目

任務を遂行する。任務つまりターゲットの暗殺。王の首を取れば戦は、終わる。将棋でも同じだ。全員が構える。俺たちは、駕籠に向かって走る。任務遂行の為なら、死をも恐れない奈落の兵士。全く恐ろしい。

一人、また一人と倒れて行く。だが、誰も見向きもせず、ターゲットだけを見る。

けれど、届かない。数が違いすぎる。今度は完全に囲まれた。残っ

ているのは、四人。対する相手は、ニー、シー、ロー、ハー
数えるのがめんどくさい。まあ、ざっと三十人くらいだろ。子供相
手に、大層なこつて。

「アジトは、何処だ」

忍びのリーダーらしき人物が尋ねる。

俺たちのアジトは、俺たち組織の人間以外知らない。他からした
ら、喉から手が出るほど、欲しい情報だ。リーダーらしき人物が刀を
振るう。

三人

「もう一度聴くアジトは何処だ」

仲間を目の前で切られても、動揺一つしない。

「もういい、死ね」

そう言つて、俺たちを斬ろうとする。

けれど、俺たちの倒れていた、仲間の一人が、そいつの足をナイフ
で斬る。

「うっ、っ」

軽傷だが、隙は作った。

その隙に、煙玉を叩きつける。ここは、逃げるのが得策だろうが、こ
いつらは逃げない。

ターゲットを殺すまでは。そして、一人が気配を消し、駕籠まで近
づく。

骸だ。

そして、骸が駕籠を、一刀両断する。

だが、駕籠の中には誰も居なかった。どうやら俺たちは、最後まで
踊らされていたらしい。

「クックク、ハッハッハハ」

敵の大将が大声で笑う。

「終わりだ」。

「やれ」

背後から忍びが近づく。

骸の首が斬られる。ら

俺は、その瞬間スローモーションに、見えた。

俺は、人を斬るのが怖い。

物凄く怖い。

死ぬほど怖い。

怖くて仕方がない。

この世界で殺す事は、必要なのかもしれない。

けれど、

もし、殺してしまつたら人間じゃなくなってしまうかもしれない。

それが怖くて、仕方がない。

けれど、

骸を、見捨ててしまつたら本当の意味で、人間じゃ無くなつてしま

うかもしれない。

わからなかった。

どれが正しい選択なのか、わからない。

けれど、

救えるのに、救わないのは、人間ではない。

もし、それが人間だというなら。

俺は、人間なんて辞めてやる。

俺は、骸を斬つた忍びの首を跳ねていた。

その瞬間、辺りが静かになる。

そのあと、俺は骸を持ち上げ、少し離れた場所に置く。

「書き取り、まだ終わってないだろ」

骸の頭を優しく、撫でる。

幸い、まだ息はある。
俺があと少しでも遅かったら、首を間違ひなく跳ねられていただろ
う。

「少し、待っててくれ」

そして敵の方を見る。

体が軽い。まるでここが俺の居場所だと、体が言っているようだ。
歩いて、敵の方に向かう。

俺は、鞘から黒雨を抜く。

呼吸を整える。

俺は、目を閉じるり

「やっやれー」

男の合図で敵が、一斉に掛かってくる。

俺は、ただ、

斬る!!

剣先を悟らせないような、剣筋。

その刃は刹那の如く。

敵が俺を囲むが、関係ない。

的確に急所を斬り、即死。

一人、また一人と、人が死んでいく。

刀が手に馴染む。

「ひっひるむな」

敵の大将と思われる人物が、声を上げる。

俺は、止まらず戦場を駆け抜ける。

敵がクナイを投げてきても、薙ぎ払い

敵が囲もうと、その刃は止まることを知らない。

守る事が、殺す事だと言うなら、喜んで殺そう。

俺は敵を、ただ斬って斬って斬りまくる。

敵が骸の方に走る。

今の俺の唯一の弱点。

敵は、動けない骸に向かって、全力疾走している。

俺は、落ちている刀を思いつき投げつける。その刀は、脛に刺さり、動きが止まる。

その隙に一瞬で近づき殺す。

刺した刀を抜き次の敵を見る。

「化け物め」

誰がこぼしたか分からないが、まさしくその通りだった。

黒い服と黒い髪を返り血で真っ赤に染め。

一人殺したら、次のターゲットにすぐさま移行する。

一人の子供が、大人何十人も斬っていく姿は、化け物そのものだった。

俺は淡々と斬っていく。

「助けてくれ！」

敵が、そう叫ぶ。

「たのッ」

俺は、喋っている途中で、そのまま切り捨てる。

気づいたら死体の、山の上に立っていた。今度は、ちゃんと覚えている。二年前、朧が言っていた事は本当だったのかもしれない。

俺は泣きながら笑った。守れた事、死ななかった事、泣けた事が嬉しかった。人を斬った事が、人で無くなってしまう事が、悲しかった。

色んな感情が重なった。

けれど最後は、

寂しかった。

俺はその場で意識を失った。

帰還

知らない天井だ。

まあ、一度言ってみただけ、なのだが。

俺は周りを見渡す。どうやらここは、ソールソサイティーでも、教会でも、ないらしい。奈落の医務室だ。俺は、手をグーパーと動かす。「生きてる」

声に出していた。

「そうね」

誰かが返してくれる。俺は声のした方を見る。骸だ。どうやらお互い、死なずに済んだらしい。

俺は、自分の体を見る。包帯でグルグル巻きにされていた。こんな重傷を、負った覚えはない。いや、覚えてないだけかも、しれない。あの時は、必死だった。傷なんて、気にしてる場合じゃ、なかったかもしれない。骸も、首にグルツと、包帯を巻いている。あの時の傷だろう。もう少し動くのが早ければ、傷を負わせることも無かったかもしれない。すると、骸がもぞもぞと、何かを取り出す。ノートだ。

「書き取り、終わった」

そう呟いて、俺に見せてきた。恥ずかしくて、死にそうだった。まさか聞こえていたとは。

「起きたみたいだな」

そう言ってみて誰かが近づいて来た。臃だ。

「お前たちを、正式に奈落の一員として向かえる」

「任務は、失敗した」

俺が臃に言った。

「いいや、成功だ。確かに暗殺は失敗したが、あいつらは、人員を失った。それは、かなりの損害だ。崩れるのも時間の問題という訳だ」

「そうか」

別に嬉しくはない。最初から、奈落に入るつもりは、無かった。

「付いて来い」

臃は、そう言ってみて部屋を、出て行った。俺達は、体を起こし着いて

いく。体が重い。怪我よりも、筋肉痛が痛いと感じた。着いた場所は、別の医務室だった。

「お前らは、正式に奈落に入った。よって八咫鳥の紋章を入れてもらう」

まあ要するに、刺青を入れるという事だ。

正直言って、入れたくはない。刺青を、入れていい事はない。銭湯にも、入れなくなるらしいし、何より厨二病だと、思われる。まあ、強制なので、何処に入れるかを考える。出来るだけ、見えないところに入れよう。足の裏とか、駄目なのかなあ。

「何処に入れるんだ」

聞いてみた。

「基本的に見えるところなら、何処でも構わない」

「どうやら、足の裏は駄目らしい。なので俺は前腕にする事にした。骸は何処にするのかと思い、聞いてみる。」

「首筋」

と、だけ答える。傷を刺青で隠すのだろう。

「悪い」

あの傷を負わせたのは、俺のせいだ。傷は、消えるかもしれないが、早い段階で隠したいのだろう。

「別に、そういう意味じゃない。ただ、この傷は覚えておきたいから」
首を押さえながら、答える。

俺たちは、それぞれ刺青を入れる。これで正式に天照奈落に入ったわけだが。檻の中の生活は、続くらしい。

そして、一年が経過した。え、早すぎる。

いやいやこんなものだから。精神と時の部屋も、外界の1日は一年もあるから。そんな、訳で今俺たちは勉強をしている。

「どうしたんですか？」

松陽が俺に尋ねる

「いや、外ってどうなってるのかと思って」

今、外の勉強をしている。俺たちは任務以外、アジトの外に出る事を、禁止されている

「では、行ってみては？」

「は？」

軽く言った言葉に驚いた。

「いや、この間テレビで見たんですよ」

「？」

何の話か分からなかった。

「プリズンブレイクです」

「そっちなよ」

「外」

そう呟いたのは、骸だった。

「外に、行きたいのか？」

俺が尋ねる。

「別に、私の居場所は、ここだけだから」

寂しそうに、そう言った。

「居場所なんて、作ればいいんですよ。今はまだ一つかもしれないけど、時期に沢山増えていきます。ねえ夜城」

松陽がそう言って、俺に賛同を求める。

「ああ、」

俺も答える。

「…」

骸は、黙っていたが。少し嬉しいそうだった。無表情だが、少しずつ感情が分かるようになってきた。

「では、みんなでプリズンブレイクしましょう」

松陽が張り切って言った。

「檻に入ってるのは、俺と松陽だけだけだな」

俺が突っ込んだ。俺も少しづつ、変わっているのかもしれない。いや、変わらせられているの方が、正しい。

脱獄

「具体的に、プリズンブレイクってどうするんだ？」

俺が、松陽に尋ねる。

「分かりません」

松陽が答える。

こいつは、考え無しに言ったのか。

「骸はどう思う？」

今度は骸に尋ねる。

「斬る」

刀を握り締めながら、答える。

「お前はそればっかだな」

俺は、最近ツツコミしか、していない気がする。

「三人で逃げて、三人で脱獄しましょう」

「最初からそのつもりだ。その為はどうするか、だ」

「普通に、逃げられないですかね」

出来たら、俺がとづくにやってる。

「骸はともかく、俺と松陽は監獄されている身、見つかったら即ゲーム

オーバー」

「私は、大丈夫だと思いますよ」

「根拠は？」

「まあ、大丈夫という事です」

そう言つてニコツと笑つた。

本当に謎だ。未だに松陽が監獄されている理由を知らない

その話になるといつも笑つて誤魔化す。変わらない。

「さて、どうしますか？」

「斬る」

松陽が悩んでいると、また骸が同じ事を言う。

「なるほど、正面突破ですか」

あの言葉に、そんな意味があつたのか。知らなかつた。けど正面突破もありかもしれない。下手に計画を立てても、イレギュラーが発生

した時に、対応できなくて、崩れるよりよっぽど良い。それに骸に、縛りをつけて、あとあと面倒になるよりかは…。そう思いながら骸の方を見る。目が合う。

「斬る?」

俺は無言で首を振る。

「正面突破もあり、か」

「そうですねでは、行きましょう」

ツドン

何か大きい音がした。お分り、いただけただろうか。この男、檻を蹴り飛ばしたのである。

「あの、何してるの?」

俺が尋ねる。

「脱獄しようと…あれ、ダメでした?」

笑いながらそう答える。

ダメに決まっている。

「正面から行くのと、考え無しに行くのは、全くの別物だ」

俺が正論を突き立てる。

「まあ失敗は、誰にでもあることです。それにもう取り返しがつきません。プリズンブレイクしましょう!」

確かにそうだが、こいつにだけは言われたくない。

「その前に、あのトイレ行っても良いですか?」

ノー天気な、松陽がそんな事を言う。全くこいつは、俺たちの立場を理解していないのか?けどれど、止めても仕方ないので、早く来るように伝える。

「いえ、先に行ってください。結構強敵なので」

と、お腹を抑えながら苦しそうな感じだ。まったく。

「あ、夜城、骸」

俺たちの名前を呼ぶ。

「化け物の剣では、化け物は斬れません。貴方達は、人の剣で私を超えてください」

「?」

言葉の意味がわからなかった。

「今は、まだ分からなくて結構です」

そう、笑って走っていった。

「さて、俺たちも行くか」

そう、骸に言って走る。

走った。

走った。

けれど、

まだ一度も敵兵に、遭遇していない。おかしな、話だ。この時間帯なら、外を見張っている奴らが、いてもおかしくない。というか、居なきやおかしい。まるで俺たちに、脱獄しろと、言ってるようなものだ。まあ、骸の場合は、脱獄じゃないけど。考え事していると、屋根から、何者かが降ってきた。

「脱獄とは随分と、思い切ったな」

そう言ったのは巨体な男。少なくとも、俺は見たことがない。

「一人で来のか？随分と舐められたものだな」

俺が挑発をする。

「隴様の命だ」

「隴が？」

どうやら隴が、この男に指示を出したらしい。

「お前たちは、この俺一人で十分だと、思ったのだろう」

相手も挑発をしてくる。

「その体、飾りだけではないんだろうな」

俺が刀に手を置く。

「ほぎけ」

「まって、甘く見ない方がいい」

骸が止めに入る。

「別に甘く見てねえよ。挑発してるだけだ」

「そう」

「お前、あの男知ってるのか」

「ええ、

奈落三羽の一人 柩

「そうか」

なんですそれ？

すごいのか？

初めて聞いた。奈落三羽ね、覚えとこ。

「取り敢えず、下がってろ。一瞬で終わらす」

「待って、私にやらせて」

俺が腰を下ろして戦闘態勢に入ると、骸に止められる

「私が斬る」

その目は、殺意の塊だった。全く、子供にこんな目をさせるとは、本当にブラック企業だ。というか企業失格だ。あれ、ここ企業だっけ？

俺が考え込んでいたら敵が動き出す。まあ待つてくれないよな。

柩は、俺に拳を振るおうとする。

が、俺の前に骸が止めに入る。

「ほう、中々だな。俺の拳を受け止めるとは」

「別に大した事じゃない。こんなの寝てても止めれる」

「いうではないか、小娘」

今度は、骸に向かって拳を振るう。また、刀で受け止める。

「先に行つてて」

「すぐに追いつくから」

奈落三羽が何かは知らないが、相手を見るに、相当の手練れだと見える。倒せるか、どうかもわからない。

けど今の骸は、まるで靴紐結ぶから先行つてと、言っているよう

に感じた。

「わかった、待ってる」

俺は、走り出す。

「行かせるものか！」

枢がそう叫ぶ。

「こっちのセリフ」

骸がそう呟く。

「恩返し出来たかな」

その声は誰にも届くことは、なかった

脱獄2

俺は柩を、骸に任せて走る。

ただただ、走る。外に出るために、走る。自由欲しさに、走る。森の中を淡々と、走っている。いきなり針が、飛んできた。

俺は鞘から刀を抜き、針を弾く。針が当たっていたら、動けなかっただろう。そう思い、周りを見渡す。

こんな事出来るのは、一人しかない

「いい加減出てきたらどうだ………隴」

俺はため息をつきながら、そう言った。気配は消せても、殺気は消せてないので、わかった。

「流石と、言うべきか」

隴がこちらに、近づいてくる。

「引き返すなら、今のうちだぞ」

隴が、俺に忠告する。

「それは、俺のセリフだ。邪魔をするなら………斬るぞ」

俺は、隴を本気で殺そうと思っている。別にこいつが、嫌いだからとかではない。まあ確かに、嫌いだけでも。別に、そういう訳ではない。ただ、殺す気じゃないと、こいつには勝てない。間違いなく相手は、奈落一の実力者だ。

「お前を簡単に行かせる訳には、いかないからな」

「その割には、護衛がいなかったが」

俺は隴に尋ねる。

「私と柩以外は、吉田松陽の処理に向かわせた」

やはりか、少なからず予想していた。明らかに少なすぎると、思っていた。松陽はそういう奴だ。俺たちの為なら、とことん尽くす。全く。

反対に、松陽のすごさを理解する。奈落の兵隊を全部動かすとか、化け物だろ。

「安心しろ吉田松陽は、まだ死んではいない」

「知っている」

簡単に死ぬ人ではない。

「…」

あたりが静まり返る。俺は、そつと黒雨に手を置く。強い風が吹く。

そして、風がやむ。

キンツ

風が止んだ瞬間、金属音が鳴り響く。

火花が散る。ほぼ同時に動きだし、刀を交える。ここからは、本物の殺し合いだ。油断した方が負ける。だから俺も、本気で行く。

約束のために。

森の中で金属音がただただ鳴る。

「全く恐ろしいな、この歳でこの実力とは」

「どけ」

俺は、無視をしてただ刀を振るう。隼は少し後ろに下がり針を投げる。

俺はそれを交わし、近づく。隼は中距離、近距離を得意とする。逆に俺はこの刀のみ。この刀の範囲が俺の攻撃範囲だ。常に近距離で戦わないと、勝機はない。

「お前は、鴉三和になる事が決まったのだがな、残念だ」

「それになれば、外に出れるのか」

刀を交えながら会話をすする

「ある程度の権限は貰えるが、自由はない」

「なら意味ねえな」

「相変わらず、剣筋が読めないな」

人には、型というものがある。奈落は、その型のもとに鍛えられる。けれど俺は違う。元々覚えていた型。つまり、転生する前に俺であり、俺ではない誰かの型だろう。俺の型は、型というには、少し棘がある。型というには、収まりきらない。

荒々しい動き。けれど何処か静かな動き。数々の戦場で、覚えたのだろう。今なら分かる気がする。

人には様々な、型がある。守りをメインとする型。攻撃をメインと

する型。色々存在する。それらは、流派に関わってくる。俺の型は、

殺す型

いや、

殺す為の型。

必ず殺す為の、動きを実現する。常に、殺す事を意識する。どう考えたら、殺せるかを考える。ただそれだけの意識が、俺の体を動かしている。この瞬間になると、いつも体がポカポカ暖かくなる。けれど、不思議と頭は冷静で、常にターゲットを殺す事だけを、考えている

「っ！」

隴は、頬を刀でかすらす。雨が降ってくる。冷たい雨だ。俺は気にせず刀を振るう。息すら、惜しい。隴がまた針を投げる。

俺は刀でなぎ払おうとする。けれど木が邪魔で振り切れなかった。針が刺さる。

「体を捻り急所を外したか」

相手は殺しのプロ。俺は、森での戦闘を、行ったことがない。

それが裏目に出た。いつの間にか、木が多いところに、誘導されていたとは。流石としか、言いようがない。地面がぬかるんできた。足が重い。とりあえず、森から抜け出さないと、勝機はない。

と普通なら考えるだろうが、そんなの関係ない。俺は、黒雨を鞘にしまう。そして服から短刀を取り出す。リーチが、短ければ関係ない。俺は、再び隴に刀を叩きつける。短刀はあまり使わない。けれど、この状況だと仕方がない。今、この瞬間で、慣れるしかない。

隴は、驚いた表情を見せる。けれどそれも一瞬。冷静になり俺の短刀受け止める。

「まさか、短刀を使うとは」

短刀でただ攻撃する、その動きは時間が経つごとに、キレが増している。慣れというものは、恐ろしいもので。短刀での、戦い方をどん

どんと吸収していく。一時間は、経っただろうか。時間すら、わからなくなる、この疲労感。殺さない、自由はない。殺さない、生きれない。殺さない、守れない。そして俺は短刀を一か八かで、臙に向かい投げつけた。臙はそれを弾く

「勝負を焦ったか」

「……」

勿論俺は、それを予想していた

すると臙の目の前に、空中に鞘が浮いている

臙は驚いたように、俺を探す。俺は気配を消して、臙の背後に回り、黒雨で首を。

掻っ切る。

一瞬。

一瞬の隙で人は殺せる。

「刀を使わないとは、言っていない」

「世話になったな」

俺は、そう言っただけ膝をついた。疲れが一気にきた。少し、血を流しすぎた。まずい。

雨が激しくなる。

すると聞こえては、いけない音が気がする。

ああ、土砂だ。

あつこれ、死んだな。

俺は気を失った。

目覚め

知らない天井だ（二回目）

いや、本当に知らない天井だ。

天井どころか、知らない場所だ。

ここは、どこ？

私は誰？

あなたは、だれ？

冗談が言えるなら、正常だろう。

あのあと、どうなった？

俺は確かく臙と殺りあつて、

あつ、土砂崩れがおきたんだ！

雨すごかつたもんなく

ちやんと交通整理くらいしとけよ、地盤ゆるゆるだろ。

「起きたみてえーだな」

考えごとをしていると、黒紫色の短髪の男が俺に話しかけて来た。

後ろには、黒髪で長髪の男もいる。

「ここが、何処だか分からねえって面だなあ」

「面じゃない桂だ！」

「誰もてめえーの事なんて、言つてねえーよ」

この二人は、コントでもしているのか？

目覚めてすぐに、このテンションはきつい。

「おい、ガキが困つてるだろうが、てめえのせいだ！」

「ガキじゃない桂だ！」

「だから、てめえの事じゃねえーよ」

「てめえじゃない桂だ！」

「少し、黙つてろ」

仲がいいのか、悪いのか。

いや、悪いな。確実に悪いなこれ。

「で、お前」

俺？

「何故、あの場所にいた」

「あそこは、情報によると奈落のアジトの近くだぞ」

黒紫の髪の男が俺に聞いた。

そう、アジトから少し離れたただけであって、あまり離れられていない。あの場所にずっといたら捕まるのも時間の問題だった。そういう意味では、運が良かったのかもしれない。それより、こいつらが何者かだ。俺たち奈落の情報を持っている。いや、今はもう違うが、奈落のアジトを知っている。正直この、情報があれば一生暮らせるだけの金は貰える。そうしない、理由でもあるのかもしれない。

「待て高杉。相手は子供だぞ、それに今日覚めたばかりだ。色々状況を把握しきれていないだろう」

「んな事分かってる。あの場所に先生がいるかもしれないねえんだ。手掛りが掴めるなら子供だと怪我人だろうと、関係ねえ」

また、言い合っている。

「どうやら長髪の男の名前が桂で、短髪の髪の男が高杉というらしい。」

けれど今、高杉という男が言っていた「先生」というキーワードだ。多分そのせいで、情報を買ったりしていないのだろう。

聞いて見たほうが早い

「先生？」

「ああ、俺たちに手習いをしてくれた人だな」

桂という男が答える。

「名前は？」

「吉田 松陽」

え？

いやまて

吉田なんだって？

聞き間違いか？

いやそんなはずはない。
同姓同名ってやつか？

「ペラペラお前は、喋るな。敵だったらどうする」

「案ずるな相手は子供だ。それとも高杉くんは、ビビっているのか？」

「誰が、ガキ一人にビビるか！お前銀時に似てきたな。何だ？リスベクトしてるのか？」

「銀時じゃない、桂だ！」

「似てるって言ったただけだろうが！」

「さて、そんな事はどうでもいい。」

「松陽……」

「お前！知ってるのか！」

「ああ、」

「松陽は俺の先生だ」

俺は包み隠さず喋った。

松陽の教え子だからか？

いや、違うなこいつら、

少し松陽に似てるからかもしれないな。

普段の俺なら、喋らなかつたかもしれない。

けれど今日は、何故か気分が良かった。

「化け物の剣では化け物は切れない……か？」

時々わからなくなる。

自分が誰なのか、わからなくなる。

この気分、前にもあったな。

あれは、確か前世の記憶。

中二の頃、東京喰種を読んでから、おかしくなった。
あれ？

亜人だったかも。

いや、青の祓魔師だったけ？

あ、これ思い出したらダメな奴だ。

俺の心の、パンドラボックスに入れておこう。

俺はそのまま眠りについた。